

### ロシア：フィランソロピーの「発見」

高橋, 一彦 / Takahashi, Kazuhiko

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

626

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

2010-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007477>

## ロシア——フィランスロピーの「発見」

高橋 一彦

---

- 1 チャリティーの復権
- 2 ロシア・チャリティー史研究
- 3 研究の今後

### 1 チャリティーの復権

「フィラントローピヤ」 филантропия, そして「ブラーゴトヴォリーチェリノスチ」 благотворительность。—— 何れも「公益の促進を目的とする人々の自発的活動」を意味するロシア語である。前者は西欧の啓蒙思想とともに18世紀末から広まった外来語で、後者がスラヴ語起源の語彙である。露英辞典を繙くと、これには「チャリティー」の訳が当てられており、今日、一般には外来起源の前者よりこちらを用いることが多い。

この長い名詞は、言葉としては実は古くて新しい<sup>(1)</sup>。古訳は「ブラーゴ (善) благо を「トヴォリーチする (行なう)」 творить こと、詰まりは「善行を積むこと」「功德を為すこと」を指し、具体的には彼岸における魂の救済を目的として富者が貧者に喜捨すること、修道院や教会に寄進することを意味していた。それはキリスト教の受容とともにビザンツから伝わった宗教的な観念であって、その動詞形「ブラーゴトヴォリーチ (慈善をする)」 благотворить とともに、古くは11～13世紀の文献に見ることができる。

古語が新語に変わるのは、社会の世俗化に伴って、その後、一旦、これが廃れたからである。近世そして近代には、新たに「プリズレーニエ (保護)」 признание, 「パペチェーニエ (庇護)」 попечение という語が登場した。帝政時代に「オプシチェーストヴェンノエ・プリズレーニエ」 общественное признание と言えば、「社会福祉」のことを指す。

容易に想像されるように、この点で決定的だったのはソヴィエト期だった。原義が帯びた宗教色が、社会主義イデオロギーと馴染まなかっただけではない。「ブラーゴトヴォリーチェリノスチ」という行為自体が、持つ者・富める者の偽善性・欺瞞性を表わすとして、全面的に否認された。帝政時代の著名な慈善団体・慈善施設には、革命が否定の対象とした皇族や資本家により庇護されたものも少なくなかったからである。試みに『ソヴィエト大百科』での「ブラーゴトヴォリーチェリノ

---

(1) 「ブラーゴトヴォリーチェリノスチ」をめぐる語義の変遷については、高橋 [2007] で略述した (2～6頁)。

スチ」の積義を見ると、「階級社会にのみ固有の現象」「ソ連の社会体制はブラーゴトヴォリーチェリノスチとは無縁である」（初版第六巻、1930年刊）とか、「搾取社会における支配階級の代表が、勤労者を欺瞞し階級闘争から逸らす目的で、無産者のある部分に偽善的に与える支援」（第二版第五巻、1950年刊）とか言われたりする。ブレジネフ期に出版された『大百科』第三版では、「ブラーゴトヴォリーチェリノスチ」は独立の項目に拾われてもいない。10月の革命直後に帝政時代の慈善団体・慈善施設を閉鎖し、接收したソヴィエト政権であってみれば、チャリティー（ブラーゴトヴォリーチェリノスチ）はすでに実践的な意義を持たない過去の歴史の一齣に過ぎないということであろう。

中世に淵源する古い言葉に光が再び当たるのは、社会主義下のセーフティー・ネットが解体し、物乞いとホームレスとが街に溢れた1990年代半ばであった。チャリティーは人々の生活の保障にとって否応なしに大きな役を果たすに至り、ロシア政府も95年に「チャリティー〔ブラーゴトヴォリーチェリノスチ〕事業およびチャリティー〔ブラーゴトヴォリーチェリノスチ〕団体に関する法律」を、96年には「非営利団体に関する法律」を制定して、民間福祉団体の活動を側面から支援していく体制を取った<sup>(2)</sup>。進行する事実の重みはその言葉ともども「ブラーゴトヴォリーチェリノスチ」を復活させ、こうしてソ連時代は貶視されたチャリティー研究の土壌が生まれたのである。

## 2 ロシア・チャリティー史研究

本国のチャリティー研究をリードする一人、Г.Н.ウリヤーノヴァは、2001年に浩瀚なビブリオグラフィ「チャリティー研究文献」を発表している（Ульянова [2001]）。その編別は興味深い。二部構成で、第一部が1804～1917年に出された帝政期の文献937点を、第二部が1990～2000年に刊行の現代の文献326点を掲げている。研究自体が禁忌に触れる営みだったソ連時代のチャリティー観を反映して、「1918～89年」がそこでは見事に落ちている。その一方で、帝政期の文献、今日から見ればロシア・チャリティー史研究のための一次史料が豊富に残されていることには、驚かざるを得ない。実は1883年刊行の『アレクサンドル二世期福祉関係文献目録』が、すでに約4,000の文献を拾っていた（Межов [1883]）。

現代ロシアのチャリティー研究の特徴は、こういう豊富な素材に基づいた歴史研究が厚いことである。ウリヤーノヴァのビブリオに依れば、1990年以後に上木された文献326点中、現代のチャリティーを扱ったものが53点、然るに主題を歴史に求めたものは251点を数える。何れも封印された過去の史実の発掘に向けた実証主義を基調とし、研究の対象とする時期は慈善団体が簇生した帝政末期が特に多い。例えば『ロシアにおけるチャリティーと慈悲』は日曜歴史家の手になる本国の先駆的研究で、理論的深みは欠くけれども「帝政期慈善団体・慈善施設データ・バンク」の趣がある

---

(2) Федеральный закон от 11 августа 1995 г. No.135-ФЗ. 《О благотворительной деятельности и благотворительных организациях》 // Собрание законодательства РФ, 1995 г., No.33, ст. 3340; Федеральный закон от 12 января 1996 г. No.7-ФЗ. 《О некоммерческих организациях》 // Собрание законодательства РФ, 1996 г., No.3, ст.145.

(Власов [2001])。

研究者の関心が集中する19～20世紀の転換期は、ロシアの都市化と工業化が進展し、大衆的貧困状況がここでも顕在化する時期である(当時の貧困観については、下里 [1995] を参照)。ペテルブルクやモスクワは1890年代に人口100万のメガロポリスに成長し、急速な人口増の結果として、都市問題がこの国においても発生した。貴族身分の没落と都市の商人身分(ブルジョアジー)の台頭が進行したのもこの時代で、これら新興層によって支えられた消費文化も帝政末期の都市生活を彩っている。スポーツや芸術の同好会も各地で生まれ、帝政末は慈善も含めて人々のヴォランタリーな活動が多面で開花した結社とクラブの時代となった。

本国の議論は、先ず個々の慈善団体やそれが運営した福祉施設の沿革史、次いでこれらの事業を担い、チャリティーを提供した人々の解明に向けられた。「チャリティーの担い手」という観点から商人身分の活動が注目され、ウリヤーノヴァもモスクワ企業家の慈善事業や寄付行動の分析からチャリティー史研究に入っている(Ульянова [1999])。特にメセナ研究は『ロシアのコレクターとメセナ実践者』(Боханов [1989])、『ロシアのメデイチ』(Гавлин [1996])、『モスクワのメセナ実践者』(Думова [1992])と、実に多い。モロゾフ家、リャブシンスキー家、プロホーロフ家などの名立たる企業家一族の伝記<sup>(3)</sup>でも、メセナに多くの頁を費やしている。但しこれらの評伝では、経営理念や経営手法など企業経営に関する叙述は総じて貧しく、ビジネス・ヒストリーとしては物足りない。

チャリティーの歴史が女性史の側の関心も呼んでいることは、別稿で紹介されているイギリスやスウェーデンの場合と変わらない。ロシアでもこれが女性の社会的活動が許された数少ない領域の一つだったからである。ハスブラトヴァの簡潔な通史は女性とチャリティーについて詳しく触れているが(Хасбулатова [1994])、ここではさらにチャリティーと女性高等教育の関わりを論じたヴァフロメーエヴァの研究(Вахромеева [2003])、そしてシスターについての最新の研究を挙げておきたい(Козловцева [2010])。

正教会もチャリティーの担い手として重要である。これは個々の教区司祭の創意工夫に負う点が大きく、多くの個別論文がある。モノグラフでは、クロンシュタットで社会事業に邁進し列聖された教区司祭イオアン(1829～1908)の評伝が、アメリカで出た(Kizenko [2000])。

これらチャリティーのトレーガーへの関心は、これも近年活発化している地方史研究と結びついた。慈善団体の会員名簿はその土地の名士を集めた Who's who 的色彩があり、チャリティーを通してその地域の特徴が浮かび上がるからである。ノヴォシビルスクではシベリアのチャリティー事情に関する基本的文献が出されており(Бочанова, Горюшкин, Ноздрин [2000])、他にもカザン(Димитриева, Исмагилов, Шарангина [2002])、サマーラ(Горячев [2001])、東シベリア(Мантурова [2005])など、成果は枚挙に暇がない<sup>(4)</sup>。ユダヤ人やムスリムのチャリティーを

(3) Иванов [1996], Морозов [1996], Петров [1997], Морозова, Поткина [1998], Прохоровы [1996], Симонова [2002].

(4) ここに掲記したのはごく一部で、ロシア国立図書館のオンライン目録で「ブラーゴトヴォリーチェリノスチ」を開くと、各地のブラーゴトヴォリーチェリノスチの模様を伝えるさらに多くの文献を知ることができる。

追った述作も多く、特にユダヤ人については纏まった研究が出されている（Еврейская [1998]）。

各地のチャリティー団体相互間の連絡・調整機関を創る動きは、1905年の革命を経て本格化した。イギリスのCOSやスウェーデンのFVOに相当する、全国組織の試みである。いくつかの学位論文や個別論文はあるけれども、一つに纏まった著作は未だない。これは今後の課題であろう。

2005年のウリヤーノヴァのモノグラフ『ロシア帝国におけるチャリティー』（Ульянова [2005]）、そして2006年のA.P.ソコロフによる通史『ロシアのチャリティー』（Соколов [2006]）は、以上の集大成である。ウリヤーノヴァはこの著作で、アメリカのA.リンデンマイアーの諸論攷<sup>(5)</sup>が研究の導きの糸となったと証言しており、2008年にはリンデンマイアーも交えた個別論文集が刊行された（Благотворительность [2008]）。だがソコロフは、研究の素材を集めて消化する段階はそろそろ越えねばならないと言う。

その欧米ではリンデンマイアーの他、都市行政史のJ.ブラッドレーがモスクワの救貧システムに言及し（Bradley [1982], [1985]）、W.バイアーがモスクワ商人のメセナについてバランスの取れた著作を出している（Bayer [1996]）。また本年になってドイツのH.F.ヤーンが、チャリティーを受ける貧民や物乞いに光を当てた研究を発表した（Jahn [2010]）。これは貴重な成果である。

単なる実証を越えた理論的関心が窺えるのはこれら欧米の研究で、そこからは、結社とクラブの時代としての帝政末のロシア社会を再検討する意図が読み取れる。例えばリンデンマイアーは、多くのチャリティー団体が開かれた組織であったこと、その構成員が身分横断的だったことを強調する。この点が注目されるのは、通説が革命前のロシア社会を身分・信仰・エスニシティーの相違によって細分され凝集力を欠くものとして、それゆえに国民形成が果たされぬまま総力戦に堪えられず第一次大戦で脆くも潰えていった国家として、これを描いてきたからである。明解であっても短兵急なこの史論に、欧米のチャリティー史研究は全身分的性格を帯びたヴォランタリーな団体が世紀転換期に急成長した史実を対置し、その再考を促しているわけである。この潮流の急先鋒がブラッドレーで、夙にロシアで「革命前のロシアにおける社会団体と市民社会の発展」と題した論文を著したほか（Bradley [1994]）、近年、チャリティー団体も含めた帝政末のアソシエーションの歴史を一書に纏めた（Bradley [2009]）。ウリヤーノヴァもこの切り口に共鳴しており、このことはチャリティー史研究がベレストロイカ期に胚胎し、体制転換後に花開いた一つの時代の学問であることを問わず語りに伝えている<sup>(6)</sup>。

### 3 研究の今後

フィランソロピーの現状をめぐる学問的な考察は、21世紀に入って開始された。その発端は、G.ソロスの支援を受けて2001年にペテルブルクで開催されたシンポジウム、「現代ロシアにおけるチャ

(5) Lindenmeyr [1982], [1986], [1990a], [1990b], [1992], [1993a], [1993b], [1996].

(6) リンデンマイアーは「ゴルバチョフ下のソ連邦で現在生じている急激な変化を瞭然とした形で示しているものに、組織的なチャリティーを含めた真に自発的なアソシエーションの蘇生がある」と言い（Lindenmeyr [1990b], p.1）、「ロシアのチャリティー団体の発展は、歴史家には市民社会の歴史のための恰好のケース・スタディーとなる」と発言している（Lindenmeyr [1996], p.230）。

リティー〔ブラーゴトヴォリーチェリノスチ〕の社会的研究」である。これを契機に論集『ロシアにおけるチャリティー〔ブラーゴトヴォリーチェリノスチ〕』（ロシア・チャリティー年鑑）が刊行され（Благотворительность [2001-07]）、研究者の相互交流の場となった。シンポジウムの模様は、創刊号（2001年刊）に詳しい。

この年鑑は毎号500頁を越えるきわめて大部な文撰で、その半分をチャリティー史関係の論文が占める。現代に焦点を当てた部分では、いくつかの共通論題の下にこれに関する紹介的な論文を収録する。例えば第2号（2003年刊）では、「チャリティー事業参加者としての非営利団体と財団」「ビジネスとチャリティー」「社会とチャリティー」といった章を置く。総じてこの部分は、「第三セクター」「非営利団体」「ファンド・ライジング」等、フィランソロピーに関わる基本的な概念群をロシアに輸入する、いわば論点の移植の窓口のようである。確かに、創刊号でも言われるように、長い研究の空白期間を埋めるべく、先ずは学問の到達点を確認し共通のディスカッションの場を築くことが、「現代とチャリティー」を考える際には最初の課題とならざるを得ない。

かつての社会主義国が、社会主義下の「大きな政府」にとって替わる「小さな政府」を選択したことを想起すれば、そこへと至る経路こそ福祉国家を経験した資本主義諸国と異なるものの、現在両者に類似の問題状況が生じていることは否めない。これら一連のトピックがロシアで熱心に咀嚼されているのも、その故であろう。だが現代ロシアでチャリティーやフィランソロピーが人々の注目を呼んでいるのは、単にこうした文脈だけに因るのではない。背後にあるのは、過剰なまでのロシア特有の動機である。例えばチャリティー史研究には、革命によって否定された帝政期の「博愛家」の事績を顕彰して、体制転換の正統性を弁証しようという関心が見え隠れする。モスクワ850年祭（1996）、ペテルブルク300年祭（2003）というような有力政治家の威信の誇示を目的とした歴史イベントも、こういう顕彰論には追い風となった<sup>(7)</sup>。また新興財閥の間でも、一つには政権に対する保険の意味で、また一つにはかつての商人身分の末裔として自己を位置付けたいとの意識を込めて、チャリティーが推奨される向きがある（Жаренова [2004]）。さらに現代ロシア政治論の観点からも、チャリティーに対する関心は高い。NGOの活動に対するプーチン政権の締め付けとして、延いては生まれたばかりのロシアの「市民社会」に対する抑圧として、昨今注目を受けたのが、「非営利団体に関する法律」の2006年改正であった。現代ロシアのフィランソロピー研究には、こういう固有の力学が働いている。

逆説的なことではあるが、ロシアのチャリティー論やフィランソロピー研究で最大の空白領域となっているのは、実は福祉それ自体への内在的な接近である<sup>(8)</sup>。とりわけチャリティー史研究には、この観が強い。ウリヤーノヴァが強調する、チャリティー史と地方史の連繫を取り上げてみよう。チャリティーを通じて地域社会の実相をより克明に把握できるというのは事実である。けれどもその担い手が地域によって多様であるということは、提供される福祉サービスの地域格差という問

(7) 背後の意図はともかく、300年祭を意識した記念出版『ペテルブルクにおけるチャリティー〔ブラーゴトヴォリーチェリノスチ〕と慈悲』は、珍しい図版を多数収録した貴重な成果である（Благотворительность [2000]）。

(8) これについては、高橋 [2007] を参照（89～96頁）。主題に内在的にアプローチする視点の乏しさは、ビジネス・ヒストリーへの関心を欠いた企業家列伝の存在と平仄を一にしている。

題を当然ながら呼び起こす。すなわちブラーゴトヴォリーチェリノスチの成長を、人々の自発性の表れとして、あるいは「市民社会」の進展として称揚するだけでは事足りない。その成長が今度は逆に地域格差の拡大を通じてロシア社会の分断を促す、すなわち「市民社会」の展望とは逆の帰結を導くかも知れない。公的部門、とりわけ国はそこで如何なる責任を負うべきなのか、あるいは過去に担ってきたのか、——福祉の歴史を繙けば明らかなように、これもまた歴史研究の重要課題の一つの筈だが、ウリヤーノヴァ以下の研究者にこの方向での立ち入った思索は見当たらない。

フィランスロピーやチャリティーは、ロシアでは体制転換後に開拓された若い学問領域である。だがソコロフも言うように、議論は青年期に達しており、現在転機に直面している。研究のロシア的磁場から抜け出して問題関心を如何に外に向かって開いていくか、ロシアの体験を国際的な比較の中に位置付ける視点を如何に確保していくかが、今後は問われると言うべきであろう。もとより、これはフィランスロピー研究に限らず、現在のロシア研究全体が突きつけられている課題である。

(たかはし・かずひこ 神戸市外国語大学外国学研究所准教授)

#### 【文献目録】

- Благотворительность [2000]: Благотворительность и милосердие в Санкт-Петербурге. Рубеж XIX—XX веков. СПб., 2000.
- Благотворительность [2001—07]: Благотворительность в России. СПб., 2001, 2003, 2004, 2005, 2007.
- Благотворительность [2008]: Благотворительность в истории России. Новые документы и исследования. СПб., 2008.
- Боханов [1989]: *Боханов А.Н.* Коллекционеры и меценаты в России. М., 1989.
- Бочанова, Горюшкин, Ноздрин [2000]: *Бочанова Г.А., Горюшкин Л.М., Ноздрин Г.А.* Очерки истории благотворительности в Сибири во второй половине XIX—начале XX в. Новосибирск, 2000.
- Вахромеева [2003]: *Вахромеева О.Б.* Духовное пространство университета. Высшие женские (Бестужевские) курсы. 1878—1918 гг. СПб., 2003.
- Власов [2001]: *Власов П.В.* Благотворительность и милосердие в России. М., 2001.
- Гавлин [1996]: *Гавлин М.* Российские Медичи. Портреты предпринимателей. М., 1996.
- Горячев [2001]: *Горячев М.Д.* Просветительская и благотворительная деятельность земских учреждений в России. По материалам Самарского земства. Самара, 2001.
- Димитриева, Исмагилов, Шарангина [2002]: *Димитриева А.М., Исмагилов Р.Р., Шарангина Н.А. (сост.).* У милосердия древние корни. Благотворительность и милосердие в Казани XVIII—начало XX вв. Сборник документов и материалов. Кн.1—2, Казань, 2002—03.
- Думова [1992]: *Думова Н.Г.* Московские меценаты. М., 1992.
- Еврейская [1998]: Еврейская благотворительность на территории бывшего СССР. Страницы истории. СПб., 1998.
- Жаренова [2004]: *Жаренова О.А.* Корпоративная благотворительность в России. М., 2004.

- Иванов [1996] : *Иванов Владимир*. Зачем человеку деньги... Хроника жизни купеческой семьи Рябушинских. М., 1996.
- Козловцева [2010] : *Козловцева Е.Н.*, Московские общины сестер милосердия в XIX – начале XX века. М., 2010.
- Мантурова [2005] : *Мантурова С.Ч.* Общественная и частная благотворительность в Забайкалье во второй половине XIX – начале XX вв. Улан-Удэ, 2005.
- Межов [1883] : *Межов В.И.* Благотворительность в России. Библиографический указатель книг и статей на русском языке, вышедших в России в период царствования Императора Александра II. СПб., 1883.
- Морозов [1996] : *Морозов С.Т.* Дед умер молодым. Документальная повесть. М., 1996.
- Морозова, Поткина [1998] : *Морозова Т. П., Поткина И.В.* Савва Морозов. М., 1998.
- Петров [1997] : *Петров Ю.А.* Династия Рябушинских. М., 1997.
- Прохоровы [1996] : Прохоровы. Материалы к истории Прохоровской Трехгорной мануфактуры и торгово-промышленной деятельности семьи Прохоровых. 1799 – 1915 г г. М., 1996.
- Симонова [2002] : *Симонова И.А.* Федор Чижов. М., 2002.
- Соколов [2006] : *Соколов А.Р.* Благотворительность в России как механизм взаимодействия общества и государства (начало XVIII – конец XIX вв.). СПб., 2006.
- Ульянова [1999] : *Ульянова Г.Н.* Благотворительность московских предпринимателей : 1860 – 1914. М., 1999.
- Ульянова [2001] : *Ульянова Г.Н.* Библиографический указатель // Благотворительность в России. Социальные и исторические исследования. СПб., 2001.
- Ульянова [2005] : *Ульянова Г.Н.* Благотворительность в Российской Империи. XIX – начало XX века. М., 2005.
- Хасбулатова [1994] : *Хасбулатова О.А.* Опыт и традиции женского движения в России, 1860 – 1917. Иваново, 1994.
- Юркин [2001] : *Юркин И.Н.* Демидовы – ученые, инженеры, организаторы науки и производства. Опыт науковедческой просопографии. М., 2001.
- Bayer [1996] : Bayer, Waltraud. *Die Moskauer Medici. Der russische Bürger als Mäzen 1850 bis 1917.* Wien, 1996.
- Bradley [1982] : Bradley, Joseph. "The Moscow Workhouse and Urban Welfare Reform in Russia," *Russian Review*, vol.41, 1982.
- Bradley [1985] : Bradley, Joseph. *Muzhik and Muscovite. Urbanization in Late Imperial Russia.* Berkley, Los Angeles, London, 1985.
- Bradley [1994] : *Джозев Бредли*. Общественные организации и развитие гражданского общества в дореволюционной России // *Общественные науки и современность*, 1994, No. 5.
- Bradley [2009] : Bradley, Joseph. *Voluntary Associations in Tsarist Russia, Science, Patriotism, and Civil Society.* Cambridge, 2009.
- Jahn [2010] : Jahn, Hubertus F. *Armes Russland. Bettler und Notleidende in der russischen Geschichte vom Mittelalter bis in die Gegenwart.* Paderborn, 2010.

- Kizenko [2000] : Kizenko, Nadieszda. *A Prodigal Saint. Father John of Kronstadt and the Russian People*. Pennsylvania, 2000.
- Lindenmeyr [1982] : Lindenmeyr, Adele. "A Russian Experiment in Voluntarism: The Municipal Guardianships of the Poor, 1894-1914," *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, Bd.30, 1982.
- Lindenmeyr [1986] : Lindenmeyr, Adele. "Charity and the Problem of Unemployment: Industrial Homes in Late Imperial Russia," *Russian Review*, vol.45, 1986.
- Lindenmeyr [1990a] : Lindenmeyr, Adele. "The Ethos of Charity in Imperial Russia," *Journal of Social History*, vol.23, 1990.
- Lindenmeyr [1990b] : Lindenmeyr, Adele. "Voluntary Associations and the Russian Autocracy: The Case of Private Charity," *The Carl Beck Papers in Russian and East European Studies*, No.807, 1990.
- Lindenmeyr [1992] : Линденмейер, А. Добровольные благотворительные общества в эпоху Великих реформ // Великие реформы в России, 1856–1874. М., 1992.
- Lindenmeyr [1993a] : Lindenmeyr, Adele. "Maternalism and Child Welfare in Late Imperial Russia," *Journal of Women's History*, vol.5, 1993.
- Lindenmeyr [1993b] : Lindenmeyr, Adele. "Public Life, Private Virtues: Women in Russian Charity, 1762–1914," *Signs. Journal of Women in Culture and Society*, vol.18, 1993.
- Lindenmeyr [1996] : Lindenmeyr, Adele. *Poverty is not a Vice. Charity, Society, and the State in Imperial Russia*. Princeton, New Jersey, 1996.
- 下里俊行 [1995] 「聖なるロシアの『乞食』——『大改革』時代の慈善論争」坂内徳明・栗生沢猛夫・長縄光男・安井亮平（編）『ロシア 聖とカオス』彩流社，1995年。
- 高橋一彦 [2007] 「福祉のロシア——帝政末期の『ブラーゴトヴォリーチェリノスチ』——」『神戸市外国語大学外国学研究所研究年報』第44号，2007年。